頻尿の鑑別診断・フォローアップ手順ガイド

松木孝和（松木泌尿器科医院長／香川大学医学部臨床教授）

本コンテンツはハイブリッド版です。PDFだけでなくスマホ等でも読みやすいHTML版も併せてご利用いただけます。

▶HTML版のご利用に当たっては、PDFデータダウンロード後に弊社よりメールにてお知らせするシリアルナンバーが必要です。

▶シリアルナンバー付きのメールはご購入から３営業日以内にお送り致します。

▶弊社サイトでの無料会員登録後、シリアルナンバーを入力することでHTML版をご利用いただけます。登録手続きの詳細はhttps://www.jmedj.co.jp/page/resistration01/をご参照ください。

▶登録手続

summary ―― p2

はじめに ―― p3

1. 頻尿の原因 ―― p4

2. 頻尿の診断 ―― p7

3. 頻尿の治療 ―― p14

4. 頻尿患者のフォローアップ ―― p16

5. 症例提示 ―― p17

6. わが国のガイドライン ―― p23

▶販売サイトはこちら

日本医事新報社では、Webオリジナルコンテンツを制作・販売しています。

▶Webコンテンツ一覧

© 日本医事新報社 2024　著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

summary

1 頻尿の原因

・前立腺や膀胱機能障害の疾患診断を優先しがちであるが，プライマリ・ケアで頻尿に対応する場合，長期にわたり関わることが多いので，生活環境や習慣などの様々な要因が頻尿の原因として患者に影響していることをイメージする。

2 頻尿の診断

・診断の基本は問診である。加えて，尿沈渣検査と腹部超音波検査を行えばほとんどの疾患の鑑別は可能であると考えている。

・もし心配であれば，悪性腫瘍の除外として，必要に応じて血尿患者の尿細胞診と，男性頻尿患者に対する血清PSA値測定を行っておくことは推奨される。

3 頻尿の治療

・頻尿の治療では100点満点をめざさない。それぞれの原因の関わり合いの度合いに注意しながら，まずは60点をめざすような気持ちで治療を開始する。患者の満足度が十分でない場合で，患者の求めに応じて治療薬を変更したり，複数の内服薬を併用したりしても，患者が期待するほどは症状を緩和できない場合がほとんどである。

・まずは，頻尿の原因となっている基本的な疾患を特定しつつ，原因別に対応する。それぞれの疾患に対する様々な治療薬に関しては極端に危険なものはないので，基本的な薬を投与する。

・男性頻尿にはα遮断薬，女性の場合には抗コリン薬やβ刺激薬が治療の中心となる。一方で，原因となる疾患が複数併存している例も多いので，それぞれの疾患への対応を要する場合もある。

・複数の疾患が影響し合って症状が複雑化している場合，環境の変化や心

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

因性などの理由を探って治療計画に組み込むことが重要である。

・患者の生活環境などをしっかりと聴取することが肝要である。

4 頻尿患者のフォローアップ

・薬が症状の軽快に望ましい種類のものであったとしても，すぐに症状は軽快しないことが多いので，必ず治療開始前にそれを伝える。

・治療により安定経過中の患者の症状が不安定になった場合にも，安易に投薬内容の変更を考慮しない。

・まずは環境を含めた悪化原因を考察してじっくりと対応する。

はじめに

本稿では，頻尿の原因などを実践的に紹介し，ガイドラインを踏襲しつつも，筆者が日常的に行っている頻尿診療について，ナラティブな視点を中心に執筆する。

いわゆる前立腺肥大症や過活動膀胱など，頻尿を呈する疾患に対する診断や投薬などの診療作法が重要であることに異論はないが，それだけでは解決しない場合が大変多い。そのため，内服薬による加療だけに頼ってしまうと，頻尿治療は非常にバランスの悪いものになることを実践的に紹介したい。後半では，症例を提示しながらポイントについても解説しているので，参考にして頂ければ幸いである。

なお本稿では，主に，頻尿に対する考え方や俯瞰的なアプローチに関して紹介したい。慢性前立腺炎や間質性膀胱炎など，各疾患の治療に関してはかなり奥が深い部分があるので，「Dr. 松木の内科で診る 泌尿器科疾患」シリーズの【前立腺肥大症】（https://www.jmedj.co.jp/premium/dmph/）【膀胱炎】（https://www.jmedj.co.jp/premium/mucy/）などもご一読頂きたい。最後に，参考にするガイドラインを紹介する。

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

1. 頻尿の原因

全身的なものと局所的なもの，しばしばその両方が併存することによって頻尿に陥る（**表1**）。

表1 頻尿の原因

全身的なもの		尿量の増加，心因性，環境因子
局所的なもの	臓器別	**前立腺疾患**（前立腺肥大症，慢性前立腺炎） **膀胱疾患**（過活動膀胱，神経因性膀胱） **尿道疾患**（尿道炎） **外性器周囲疾患**
	原因別	**感染症**（膀胱炎，前立腺炎，尿道炎，包皮炎，外性器炎） **炎症**（間質性膀胱炎，非細菌性慢性前立腺炎，外性器の非特異的炎症） **尿路結石症**（膀胱結石，尿管結石） **悪性腫瘍**（膀胱癌，前立腺癌） **前立腺肥大症** **慢性前立腺炎** **膀胱機能**（過活動膀胱，神経因性膀胱）

（1）全身的なもの

①尿量が多くなるもの

水分摂取過多や糖尿病による飲水量の増加は，尿量が増えるために，結果として頻尿となる。飲水が増える理由としては，「血液をサラサラにする」などの目的で意識的に水分摂取を推進している場合と，糖尿病などによって意識しないうちに飲水量が増えている場合などがある。

さらに，過度のアルコール摂取や服薬に伴う飲水量の増加が，水分過剰摂取の一端を担っている場合もある。

②心因的なもの

心因的な要因は，基本的に頻尿に傾いてしまう。すべての頻尿に何らかの形で心因的な要因は関わっていると考えて診療を進める必要がある。「尿に行きたくなるのではないだろうか？」「今のうちに尿をしておいたほうがよいのでは？」など，排尿や尿意を意識することで排尿回数は増える

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

傾向となる。多くの患者は，そういった頻尿の出現に対して不安を持っているものである。

③環境因子

冬期や，寒いところへ行ったときに頻尿気味になるほか，夏でもクーラーのきいた部屋ですごすと頻尿気味になると訴えることは多い。逆に，夏の暑い時期などで多量の発汗があるときには，当然尿量が減ってくるので頻尿症状は軽快傾向となる。

(2) 局所的なもの

①臓器別

◆前立腺疾患（前立腺肥大症，慢性前立腺炎）

前立腺肥大症などによる下部尿路通過障害は，頻尿の原因となる。高齢男性に頻尿がみられた場合には，最初に鑑別を要する疾患である。慢性前立腺炎は，青年期からみられる男性頻尿の重要な原因である。前立腺肥大症や慢性前立腺炎などの前立腺疾患に伴う頻尿は，通常，尿線の狭小化を伴う。

◆膀胱疾患（過活動膀胱，神経因性膀胱）

過活動膀胱は女性における頻尿の重要な原因疾患である。女性の頻尿で尿沈渣所見に問題がみられなければ，最初に考える疾患である。

◆尿道疾患（尿道炎）

尿道の炎症も頻尿の原因となる。初期排尿時痛を主訴に診療に訪れ，外尿道口からの排膿を認めることが多い。男性の尿道炎は，基本的に性感染症として取り扱う必要がある。

◆外性器周囲疾患

男児の包皮炎や女児の尿道周囲の非特異的炎症，高齢女性における閉経関連泌尿生殖器症候群（genitourinary syndrome of menopause：GSM）など，尿道や性器周囲の非特異的炎症は頻尿の原因となりうる[1)]。特に，女性の場合には，検査や診察で判別が困難なことが多く，原因不明の頻尿

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

の原因として留意しておく必要がある。

② 原因別

原因となる疾患とその症状のポイントを大まかにまとめたものを**表2**に示す。

表2 原因疾患とその症状のポイント

感染症	排尿時痛
炎症	蓄尿時痛
尿路結石症	尿潜血，血尿
悪性腫瘍（膀胱癌，前立腺癌）	血尿
前立腺肥大症	尿線の狭小化
膀胱機能	原因がはっきりしない尿意切迫感

◆感染症（膀胱炎，前立腺炎，尿道炎，包皮炎，外性器炎）

下部尿路の感染症は，頻尿の重要な原因である。急性の感染症による頻尿は，急に症状が出ることになる。

◆炎症（間質性膀胱炎，非細菌性慢性前立腺炎，外性器の非特異的炎症）

前述の外性器の感染症のほかに，間質性膀胱炎や慢性前立腺炎などの非特異的な炎症が原因となっている可能性にも留意する必要がある。

◆尿路結石症（膀胱結石，尿管結石）

膀胱結石は，結石による膀胱への直接的な刺激が頻尿の原因となるが，尿管結石も膀胱近くまで下降してくると刺激症状を呈するようになる。

◆悪性腫瘍（膀胱癌，前立腺癌）

尿路の悪性腫瘍も頻尿の原因となる。悪性腫瘍による頻尿患者は，顕微鏡的あるいは肉眼的血尿を伴うことがほとんどである。

◆前立腺肥大症

高齢男性における，最も多い頻尿の原因である。尿線の狭小化を確認する。

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。

◆慢性前立腺炎

青年～壮年期の男性における頻尿患者の場合，必ず鑑別疾患に挙げる。

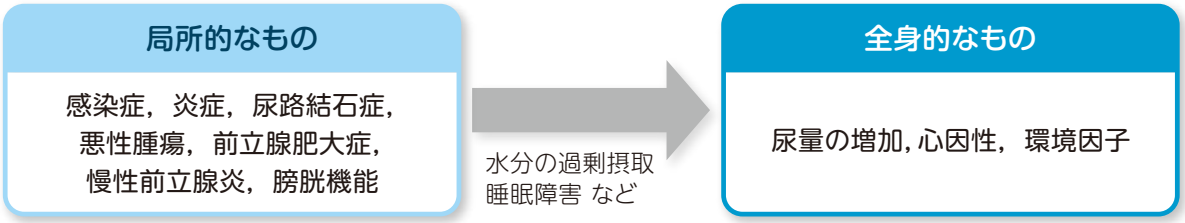
◆膀胱機能（過活動膀胱，神経因性膀胱）

過活動膀胱や膀胱コンプライアンスが低くなるような神経因性膀胱は，頻尿の原因となる。女性では前立腺による頻尿はないため，膀胱機能の障害による頻尿が原因のほとんどとなる。

（3）複数の原因が併存している場合

頻尿を訴える患者では，原因が1つであることはむしろ少なく，特に高齢者では，様々な割合で複数の原因が併存していることが多いという認識が基本となる（**図1**）。

図1 原因の併存



たとえば，前立腺肥大症の患者が前立腺炎を発症し，さらに水分の過剰摂取を行っている上に睡眠障害がある，などが挙げられるが，その原因の一つひとつはいずれもありふれたもので，このような患者は決して特殊な例ではなく，むしろ意外に多い。

2. 頻尿の診断

診断までの流れを，**図2**にまとめた。

© 日本医事新報社 2024 著作権法上での例外を除き、無断複製・転載は禁じられています。